



Title	人間性
Author(s)	小西, 重直
Citation	懷徳. 1935, 13, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88927
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德 第十三號



人間性

小西重直

本日記念祭に當りまして一場のお話を申上げることが、誠に私の光榮でありまして、且又恐縮に感じて居る次第であります。本日は題目は「人間性」といふ極めて漠然たる、而も大きな題目を掲げたのでありますが、申上げることが甚だ粗略なものであらうと思ひますので、その點は惡からず御了承願ひたいのであります。

最近哲學その他精神上の方面の學問に於きまして、人間學といふ聲が大分高まつて來て居るのであります。この人間學、所謂人間を研究する學問でありますが、人間學といふ言葉なり、その研究は、決して今日起つたのではないので、餘程以前からあつたと思ふのであります。これに就きましては、

西洋の方では、先年マックス、シェラーといふ哲學者が、昔から今日までの人間學の研究の重なる傾向に就て、若干擷み上げて、その研究の方向を論じて居るのであります。例へば第一は宗教的の人間學でありまして、これは西洋の宗教であります。この人間といふものは神によつて造られ、而も相當の自由を與へられて居つた。その自由を亂用したために罪に陥つたのである。それを救済し又救済されること、人間の大切な役目であるといふ風な意味の立場から、人間といふものを宗教的に研究して見ようといふ意味で、宗教的な人間學といふものが、昔から又今日もあるのであります。又もう一つは理智的の人間學でありまして、人間には動物的でない所の理智といふものがあります。さういふものを中心にして、人間といふものを研究して見ようといふ立場の、理智的の人間學といふものがあるのであります。昔も今もその傾向があらうと思ひます。第三は生物學的人間學といふものであります。これは人間といふものを他の動物と比較して、さう何も違つたものでない、發達の度合が違つたものであるといふ意味で、研究して見ようといふのであります。第四は厭世的人間學といふものであります。人間といふものは元來病的なものである。人間世界は一種の病氣の世界であるといふ人生觀、人間を暗く觀てしまふといふ立場から、人間を研究して見ようといふ、さういふ種々の立場があります。第五としまして、超人間的人間學といふものがあります。これはドイツの哲學者のニーチェなどの立場から出發致しましたものでありまして、現實の人間でなしに、現實の人間以上の人間を考

へ出したのであります。これは無神論的の傾向を持ち、又人間を力で行かう、人生を力で渡らうといふ傾向のものであります。さういふ風にマックス、シェラーといふ哲學者は、從來の人間學の立場を五つに分けて居るのでありますが、私はもう一つ道德的人間學といふものがあるのでないかと思ひます。例へばカントの哲學がそれであります。カントは人間學といふ書物にも書いて居りますが、人間といふものは生理的方面から研究するよりも、寧ろ實踐的方面から研究して見ようといふのが、カントの立場であります。人間として出来ること、又しなければならんこと、さういふ方面を主として研究して見ようといふことであります。併し實際カントの發表して居る人間學の中には、實踐的の道德それ自身に就ては、あまり書て居らないのであります。道德のことに關しては寧ろ道德論に於て説いて居るのでありますが、併し廣い意味から申しますれば、カントの人間學的立場は一種の道德的人間學と云うてよいかと思ふのであります。

斯ういふ風に色々なものがありますが、私共今日考へて見まして、宗教的人間學は西洋の宗教を中心としての立場でありますから、吾々としてはこれによることは、頗る狭いわけでありまして、東洋には東洋の宗教がありますし、西洋には西洋の宗教がありますが、一般の立場としては西洋の宗教のみを中心することは狭いと思ひます。又第二の理智的人間學、これは理智、智識の立場を主として居りますが、人間には情意の方面が大切なものでありますから、この理智の方面から研究するのも必

要ではありませんが、果してそれが最後の解決をなし得るや否やは疑問であります。それから生物學的人間學、人間は他の動物とさう違つたものでない、ただ度合の違ひだ、これも亦吾々としては頗る當を得ないと思ふのであります。無論人間も生物でありますので、他の生物と似通つたものをもつて居りますけれども、又違つた所をもつて居りますから、斯ういふ立場を人間の本質を研究する人間學の立場とすることは、間違つて居るのではないかと思ふのであります。又厭世的立場、これは人間はさう暗いものでなく、病氣的のものでない。若し病氣的のものであれば、科學の研究も出来るものでないのであります。又超人間學、これも現實の人間を顧みずに、概念的の理窟で人間を考へ出さうといふ人間學であれば、現實の人間とは餘程縁が遠いものでありますから、斯ういふ人間學もどうかと思ひます。

それで吾々は人間の道德的の立場、それに極めて廣い意味の宗教と申しますやうなものが加味された立場といふものが、最も人間學といふものを研究する立場としては、穩當なものではなからうかと考へて居るのであります。私のこれから申上げること、大体さういふ宗教的、道德的立場とでも申しますか、さういふ意味の考へをもちまして、お話を申上げて見たいと思ふのであります。

人間性には生れつき天然自然に吾々が興へられて、もつて來て居るものと、又この天然自然に興へられたものに基づいて、教養の結果として吾々が爲し得るもの、教養を経た上で、立派になつた人間

性と兩方があらうと思ひます。即ち人間性には天然に來るものと、努力の結果來るものとあらうかと思ひます。これから申上げることは、既に私のさやかなる著述の中に書いてあるのでありますが、本日はその大体の精神は變らんのであります。たゞ言葉遣ひ説明の方法等を變へまして、お話を申上げて、御批判を仰ぎたいと思ふのであります。人間性といふものの本質といふやうなもの、これは頗る大問題で甚だ大膽な試みでありますけれども、大体さういふものをお話致して見たいと思ふのであります。

人間の精神といふものは色々考へて見ますと、一階二階三階と層のやうになつて居るやうに考へられる。これは井リアム、シュテルンなどの考であります。一番初め表面の層は所謂表面的な現象層であります。これはまだ自分といふ考へが出て來ない。自分が斯うしやう、ああしやうといふ我れといふものが、まだ發生して來ない。ただ外界の刺激に支配される。自分が見やうとするのではなく、ただ自然に事物が目に見ゆる。自分が聴うとして聴くのではない、外界から自然に音が耳にはいつて來る。もう一つ奥にあるのは、知情意の色々な働きに於て自分が見、自分が聞くといふやうに、我れといふものを發動致します。これが第二層であらうと思ひます。第三層と致しましては、さういふ我れといふものが發動致しまして、色々な働きを致しますにはその奥には、例へば色々なものを考へると各個の働きをします奥には、吾々は一般にものを考へるといふ思惟的傾向をもつて居ります。一般思惟

の流れがあると思ふことが出来ます。又情や意志の方面に於ても一般に情的の流れや、意志的の流れがあると思ふことが出来ます。第四層と致しましては、さういふ一般の流れがある以上は、その流れを流がす所の川床がなければならぬ。その川床が即ちこれが我れといふもので、自我といふものであります。

それならば自我といふものはどういふものであるか。茲に最も重大な問題が来るのでありますが、これは古往今来色々苦心されて居る次第であります。自我といふものは一口で申しますれば、統一と申しますか、散漫ではない、多様を統一した活動であります。ばら／＼のものでなしに、纏つた活動的の生きたものであると言はれるであらうと思ふ。吾々はいつも不安なる状態に居ることを欲しない、安心を得たい、落付きを得たい、心の統一を得たいといふことを、いつも思つて居る次第であります。心が散漫でありますれば力が無い、力が無いからどうしても不安であります。統一があれば心に力があつて安心が出て来る。統一がなければ心が不安であるから不満足である。吾々の心そのものは活動そのものでありますが、活動そのものは心の統一であります。結局人間は完全なる統一心境に居りませんから、完全なる安心、完全なる満足を得たいといふ考へに進んで行くものでないかと思ひます。これは赤ん坊時代から少年時代、青年時代、大人の時代と、發達の仕方なり要求が違ふと思ひますけれども、どうしても相當の安心を得なければ人は生きて行かれない。赤ん坊でありましたも母

の乳を飲むといふことは單に、空腹を充たすといふ生理上のこのみではなく、それによつて心の安心満足を得るのであります。心の生命が維持されて行くのであります。斯様な心が漸次外面から内面に向つて、完全に或はこれが宗教的にまで發展して、大きな内面の安心、統一にまで行かうといふものでないかと思ひます。

そこで統一といふことは言はゞ自我の形式上の方面であります。然らば其の内容はどんなものでありませうか。吾々は統一の心境に居り、心に一つの秩序が出来、安心が出来、満足が出来るといふことは、眞實——誠といふものであります。さういふ眞實といふものでなければ、どうしても統一にならないものであります。嘘偽りをもつて居つては、吾々はどうしても不安であります。仕事をしましてもどんな事をしましても、どうしても眞でなければ力が出て來ない、不安を感ずるといふわけでありまして、苟も統一を要求するといふ以上は、眞でなければならん。苟も眞でありますれば其處に統一がある。この眞實といふことは、少くとも其萌芽を人間はやはり生れながらにして自然に與へられてあると思ふのであります。御承知の如く論語には、孔子の教として、「君子に九思有り」といふことがあります。即ち「視ること明ならんことを思ふ」「聽くこと聰ならんことを思ふ」「色は溫ならんことを思ふ」「貌は恭ならんことを思ふ」「言は忠ならんことを思ふ」「事は敬せんことを思ふ」「疑は問ふことを思ふ」「忿れば難を思ふ」「得るを見ては義を思ふ」斯ういふことが論語に出て居るのであ

りますが、これは人間生れながらの自然だらうと思ふ。明治天皇の御製の中に、

思ふこと思ふがまゝにいひ出づる

幼な心や誠なるらん

子供は思つたことをしやべつてしまふ、子供は嘘偽りが無い、誠である。どんな人間でも物を見る場合には、間違つて見てやらうといふ者はない。ものを聴きます場合でも、間違つて聴いてやらうといふことを思はない、正しく聴いて見やうと思ふ。疑が起つた場合には人に尋ねて見やうと思ふことも自然に起る要求である。仕事をする場合には間違ひなくやつて見やうと思ふ。これは君子ばかりでなく、或る程度迄は一般の人間も皆考へることであらうと思ふ。無論忿る場合には難を思ふとか、物を貰ふ場合には義を思ふとか、貌は恭を思ふとか、言は忠を思ふとか、色は溫を思ふとか、これ等は皆教養ある人でなければならぬ、所謂君子であつて初めて思ふ所のものであらう。又事は敬を思ふかか祝思明、聽思聰でも其の眞實のものは君子にして初めて思ふ所のものであらう。けれども吾々は教養を経て斯ういふやうに思ふことは、これはやはり人間性であるのであります。即ちこの九思の中には或程度迄自然的に現れて来るものもありますが、又教養の結果として現れて来るものと兩方あります。人間はこの兩様の素質をもつて居るものであらうと思ひます。

斯ういふ意味に於きまして、私は人間の誠、眞實的にものを統一し、偽りのない誠といふ意味で自

分を統一し、總てのものゝ仕事をやつて行かうといふ時に、初めて精神、本當の自我といふものが生きて行く、所謂自我の本質が發展して行くのである。中庸に天の命之を性と謂ふといふことがありますが、この天はものとしての天でなく、道理といふ天でもなく、絶対といふ意味であらうかと思ひます。この絶対といふものの絶対の眞實と見ても、よくはないかと思ひます。この絶対眞實の精神といふものゝ一部分が、自然に宇宙萬物に皆備はつて居る。この絶対の至誠眞實は實に天の道である。只人間はこれを誠にするといふ力がある。人間はその天の道を反省して失はないやうに、それを更に發展するやうに、所謂、之を誠にするは人の道であるといふやうに反省し、努力する力を吾々は備へて居るのであります。即ち人間性の本質には自然に與へられて居る至誠眞實性と努力によりて益々之を立派なものにするといふ力があるのである。こんな風に見ることが出來はしないかと思ひます。絶対眞實、これは永遠的なものでありますから、無論生死といふものはない。それを超越したものであります。又主觀、客觀、宇宙萬物の總てに貫いて居るものである。或は中庸にあります至誠無息は幽久であり、高明であり博厚であるといふやうに、廣く盛んなものである。或は諄々として懇切なる姿であります。或は永遠たる淵、靜かなものである。又廣大無邊なものであるといふ風な至誠眞實の姿、それが人間に自然に現はれ、又人間がすべきものであります。

これを社會的に見ますれば、吾々は社會の人を信賴して互に社會生活が出來るのであります。

又吾々はよく自覺と申しますが、その自覺は天の道を自覺して、更に吾々はそれを誠にする人間の道を發展さして行くといふことを考へて、努力精進するのが、それが本當の自覺である、斯う考へるのが、自覺に努力を致しまする道行でありますが、その道に私は三つの道があるやうに思ふのであります。更に言換へれば、至誠眞實の精神といふものは、その根本に於ては、三つの姿を取つて現はれるものである。そしてこの三つの姿は人間の一切の文化の根源となるものであつて、この根源がなければ、一切の文化は生れて來ない、人間の價値の生活は絶対に生れて來ないと、私は考へて居るのであります。

この三つの姿といふのは即ち敬・愛・信であります。敬・愛・信の三つの姿を通じて誠といふものが現はれて來る。これを誠にするは人の道なりといふが、これを誠にするにはこの三つの姿が必要なのであります。これは人間性を人間性たらしむるのに欠くべからざる根本の力であります。

然らばその敬といふことはどういふ風に解釋して行くか。これは儒學の方面でやかましい問題でありませうが、敬には少くとも朱子の言ふ「主一無適」の状態が必要であらうと思ひます。それに尙吾々は或る相當の價値に對しまして、敬ふといふ態度を持することが出来る。それを崇敬する、或は敬仰する。人間はお互ひ人格的のものでありますから、粗末に出來ない。カントの申しますやうに、自己内部の道德性に對して自敬の態度を執ると同時に、人の人格をも敬はなければならんと思ひます。

又生きた人間ばかりでなく、祖先を敬する。日本では、祖先崇敬といふことは最も大切なことになつて居ります。又吾々が仕事をして参ります場合に、所謂事に與つた場合には敬を以てやる。輕々しくしない、篤敬的にやつて行く。又この敬といふものが餘程進んで参りますといふと、何と申しますか神佛などに對する畏敬といふ状態であります。論語にも、三つの點を畏れる「天命を畏れ」、「大人を畏れ」、「聖人の言を畏る」といふことが、ありますがその畏敬であります。この畏敬といふことは、恐怖といふことと全く違つて居ります。恐怖といふことは、自分の一心に何か危害が加はるのぢやないかと思つて、それから逃れる態度であります。従つて恐怖の場合には吾々は畏縮します。所が畏敬といふのはそれとは全く違つて、吾々は或る絶大の威力を感じ、或る絶大の崇敬、莊嚴の感じを受けて緊張する。緊張して而も非常な大きな印象を得て、ある意味に於いては絶大の威力莊嚴そのものが、自分の胸にはいり腹にはいつて、その一種の絶大の氣に打たれる。斯ういふ風な有様でありますから危険から逃れようとする恐怖とは全く違ふと思ふのであります。故に畏縮ぢやなしに、むしろ非常に大きくなつて行くものであらうと思ひます。絶大的威力莊嚴にはいるといふことになりますから、茲に活きた敬、活敬といふものが、非常に密接な關係を持つて來やしないかと思ひます。竹山先生の非常な感化を受けられた佐藤一齋先生の言志録の中に、活敬といふことが説かれて居ります。敬といふことは畏縮ぢやいかに、死んだ敬ぢやいかに、活きた敬でなくぢやならん、活きた敬といふものはど

ういふものであるかといふと、例へば馬に乗つて敵陣に突進して行く、強い弓で敵の甲冑を射ぬく、これ等は皆活敬である。敬といふものは動的の強いものをもつて居る。斯様な場合は我々は所謂畏敬の心境に居り、絶對者の命と自分の意志の一致を示すものである。無論これには平生の修養が大切でありますけれども、さういふことが出来ると思ふ。畢竟敬を起すには謙遜の態度とか、或は様々の修養が必要と思ひますが、結局は敬は動的のものでありましても、靜的のものでありましても、少くともこれは自分の内面生活といふものを、正しくするものであります。易にも「敬以直内」といふことがあります。その正しきものが外に出て來て、或は死んだ敬でなく活きた敬になつて來る。この活きた敬になつて來るのに、「義以方外」といふことが易にあります。義の方は實踐的の方面、眞實至誠正しいことに適つたことをやつて行く點が義である。國家社會を立派にして行くのである。斯ういふ内外相一貫して敬の力を盡すべきものでないかと思ひます。内敬と外義は不可分のものである。内に働く敬と、實行的に外に働く所の義は即廣義の活敬であると思ふ。斯くして社會の方面にも秩序が出來ますし、又禮も興りませうし、これによつて社會全体の基礎が立つて來ると思ふ。

この敬も幼兒の精神に自然に起つて來る方面と、又教養の結果と兩方あると思ひます。幼兒の方面に自然に起つて來る敬は、家庭に於てはその父母兄弟などに對する敬がそれであります。又幼兒が玩具一つで遊んで居ります場合でも、それを一生懸命眞面目に取り扱い、粗末にしないといふことが隨

分あります。これは幼兒に於ける敬の自然の萌芽であると思ひます。又修養の結果、敬になり得るものであります。何れにしましても、これは結局人間の自然に素質を受けて居るものであらうかと思ひます。斯様な意味で、敬といふものが、一つの誠心眞實の現はれとして起つて來ます。

これは一つの譬へでありますが、木火土金水の五行の方面から見ても、敬といふものは火の姿でないかと思ひます。これは一齋先生もさう申されて居るのであります。例へば敬の精神をもつた人に吾々が對する場合には、一寸火に對する感じがする。これに近づけば火でありますから、手を温めることが出来る。併し之れに觸れると手が焼ける。そこで敬は二者の間に距離を豫想するものである。これに對して愛の精神は、熊澤蕃山先生などは、木火土金水の木に安排されて居るやうであります。斯様なものを私は敬と考へて居る。敬を通して人間の誠心眞實が發展するものであります。

第二は愛であります。宇宙の萬物といふものは、それ／＼個体々々になつて居ります。個体々々の中に距離があります。これが宇宙間の差別の相であります。敬にはこの差別が豫想されます。これに對して萬物一体になすといふ姿があります。これが即ち愛の姿でないかと私は思ふ。所謂愛は萬物一体の姿である。佛教で申します須彌山といふ非常に高い山を、消壺の中へ入れてしまふ。どうしてはいるだらうか。これは須彌山と消壺と違ふものだと考へる方には、どうしてもはいりません。併し同じものだと考へるとはいつてしまふ。親は子を自分の目に入れても痛くないといふ心であります。

斯ういふやうに、愛には萬物一体といふことが豫想されます。カントはこの愛を二つに分けて居ります。一つは愛慾の愛、肉慾の愛である、感覺的なもの、第二は實踐的の愛、斯う分けて居りますが、實踐的とは主として道德的といふことであります。私はもつと廣く、宗教的なものも含めて、精神的愛と申すのであります。

儒教の方にもあります如く、仁者は自分が立たうとして、人を立てる、難を先にして獲ることを後にする、さういふ態度が愛に必要で、吾々は犠牲の精神といふやうなものがなければ、愛にならない。而もこの精神上の愛は、これは殆ど無限なものでありまして、肉慾の愛でありますといふと、或る一人を愛しますれば、他の人間に對する愛情はさう起らない。けれども精神上の愛は、親が子を愛する如く、ごの子に對しても——二郎に對しても、三郎に對しても、同じ幅の同じ太さの愛で行くといふことであります。精神上の愛は無限の力をもつたものであらうと思ふ。さういふ意味に於ける愛、而も斯様な犠牲の精神でありますから、人のために勞を惜しまない、犠牲を樂しむ。國民に斯様な愛があつて、初めて國が發展し、學者に學問を愛する心があつて、學問が發展する。總て愛があつて事物は發展すると思ふ。愛は實に萬物發展の力であります。

敬にも愛にも何れにしても非常な勇氣が要りますし、克己の精神が伴つて來なければならんと思ふのであります。また愛といふもの、生れながらにして出て來ると思ふのであります。孝經にはたし

か、父といふものは敬と愛と兩方を兼ねて居るものである、父を敬する態度で君を敬する、父を敬する態度で母を愛して行く、といふことがあります、これは私は、さうすべきものだといふ道德上の教へだと思ひます。そこまで行かないで、自然のものを見ますと、愛は父よりは母だらうと思ひます。自然のまゝでは母と子供の間に起ると思ひます。敬は父と子の間に起ると思ひます。孝經のは父と母を兼ねたものであります。けれども自然のまゝでは愛といふものは、母と子の間にあるのであります。その意味で母親が子供を愛する、子供が又母を愛する、一身体、子供は母と一体になつて離れないといふ愛情が出て来る。これが最高の自然のものでないかと思ひます。又教養によつて、吾々は邪心も私心もなく、本當に奉仕して行くといふ心が發展して行くのでありますが、結局吾々は、さういふやうになつて行く素質をもつて居るのであります。

斯様な意味の敬と愛であります、これは愛敬は互に表裏のやうなもので、敬のない愛は天性になり、愛のない敬は天性にないものである。これは敬、これは愛といふ分ちはありませんけれどもこれは常に敬愛と結び合つて居るものであらうと思ひます。藤樹先生は斯様な愛敬の精神を、一切道德の根源として居られる。この愛敬の精神を以て二心なく君に盡すのは忠になつて来る。友に交はれば信になつて来る。親に對しては孝になる。皆根本は愛敬である。と斯う説いて居られるのであります、私はその説を更に廣めて、愛敬の精神は一切の文化の根源だと思ひます。愛敬の精神がなければ

ば、眞面目に考へることも、眞面目に働くことも出来ない。又愛敬の精神がなければ學問といふものも、絶對に起るものでないと思ふ。或は經濟方面のことでもさうでないかと思ふ。愛敬の精神がなく事物を粗末にしたら經濟が起つて来るものでないと思ひます。又社會生活にしてもさうであります。愛敬の精神がなければ社會生活は維持されない、發達もしない。教育も全くこれが根本である。これがないければ教育は成立たないと思ひます。宗教も道德も無論さうである。藝術もさうであります。一切の文化はこの愛敬の精神を失つたら、どうしても發展しないと思ふ。

第三に信でありますが、誠心眞實の精神は信といふ姿で現はれて来る。これは所謂信は誠でありますから、人間の誠心眞實の精神が現はれたそのまゝの姿と思ふ。そこで個人的には信念とか、或は自信とか、或は進んでは宗教の信仰といふ所まで行き得るのが信である。或は社會的には信用信頼とかいふのが、皆信であります。

斯様な意味で、誠そのものゝ信、この信といふ態度があつて、嘘偽りがなくなる。内面的に統一する。従つて茲に内面的に秩序が立つて来る。その結果力が起つて来る、勇氣が起つて来る、今まで見ない世界が起つて来る。この誠の精神に還つて、茲に今まで見ない世界、今まで見ない力が現はれて來ると思ひます。こゝに感謝歡喜の心も起る。論語にも「人として信無ければ其可なることを知らざるなり、大車輓無く、小車輓無ければ其れ何を以てか之を行かん哉」といふ教へがありますが、つま

り大きな車に輓、小さい車に輓がついてゐなければ車が進まない。人間も一步も進まないといふ孔子の教へであります。これを文化生活に於て考へますれば、學問をすることも、それは根本は信であらうと思ふのであります。信なくしては如何なる學問でも出来ないと思ふ。學問の根本は信であると思ひます。本當の藝術も信がなければ出来ないと思ひます。御承知の雪舟が明に行つて居つたのであります。その時に富士山と興津の清見寺と田子浦を一幅の繪として描いたさうであります。清見寺の境内に高い塔があると思つて。塔を描いたのであります。所が日本へ歸つて清見寺へ行つて見ますと、塔がなかつたのであります。そこで雪舟は非常に惱んで、彼は淨財を募集して、たうとう塔を造つたさうであります。今はその塔は残つて居りませんが、斯様な信實な雪舟であつたから、其の信實が繪畫に表はれ立派な作品となつたものであると思ひます。信がなければ道徳は破滅であります。經濟でも信がなければ破滅であります。社會生活でも信がなければ破滅であります。國家の政治に於ても信がなければ破滅であります。論語にも、人間は食を欠乏して死んでも信といふものを失つてはならん、といふことが出て居る。その位信といふものは大切であらうと思ひます。國家、社會、政治、道徳、宗教、學問、藝術、殊に教育に對しては誠に大切なものであります。母を子供が信ずるから、子供は母の與へた物を食べるわけであります。それで發育をして行く。先生を信賴して居るから教育が出来るわけである。さういふやうに信は教育の成立に欠くべからざるもので、而も一切の文化の根

元であつて、これがなければ凡べての文化は起つて來ない。假に起つて居つても破滅してしまふと思ひます。敬といふものは萬物の間に差別や距離を豫想し、愛は無差別を豫想して居るが、信といふものは萬物を包容して居るものである。萬物を載せ萬物を覆うて居るものである。信がない所には、どうしても敬も愛も起つて來ない。さういふ根本なものでないかと思ふ。具原益軒先生の書物を見ましても、愛敬の精神には信が必要である、愛敬は信實にして欺かざるものでなければ困る、と言つて居られるのであります。どうしても信といふものは根本であります。

斯様なわけで至誠眞實性の精神といふものが、敬愛信の姿を取つて現はれて、又敬愛信の力によつて眞實性が發達する。又一切の文化が發展して來るのである、斯う思ふのであります。そこで斯様な敬愛信の三つの姿は、また人々の個性でもあると思ひます。人間によつては比較的敬の態度の強い人、又比較的愛の態度の強い人、或は比較的信といふものが強い立派な人もあり、これ等三つが調和された誠に圓滿な人もあるであります。これ等三つの精神の持合の度合によつて人々の人柄が出来ると思ふ。吾々お互ひ皆専門の仕事をもつて居りますけれども、その専門の仕事をもつて居ります中に、人柄といふものがある。その人柄に敬愛信の度合が現はれて居るのぢやないかと思ひます。愛と信があるが、敬の方が幾らか少い。或は敬はあるが、愛が幾らか少いといふやうに、人柄があると思ふ。例へば日蓮上人といひ人は、敬の態度の人でないかと思ひます。親鸞上人などは愛の方の強い姿でないか

と思ひます。山崎闇齋先生などは敬の強い人柄であります。伊藤仁齋先生は愛の方であります。政治家で言へば、濱口氏のやうな人は、素朴な信の人柄であつて、何んとなしに嘘偽りのないやうに思はれます。

個性には天性そのまゝの個性があり、又教養の結果、天性に多少の變化を來たした意味での個性もあります。其の何れにしても右に申したやうな個性があり得ると思ひます。至誠心眞實の姿としての敬愛信といふものは、元來は人間自然の姿として現はれて來るものでありますが、その現はれて來る場所は、家庭ぢやないかと思ひます。家庭に於ける夫婦、兄弟の間にお互に相信じ、互に相敬し、お互に愛するといふ傾向が、自然に現はれて來る。殊に親子の間に起る敬愛信は實に最も純なるものである。その精神がやがて各方面に向つて——社會に向ひ、國家に向つて、茲に立派なものが出来て來るものぢやなからうかと思ふ。我が日本といふものは、親子本位の家族生活であるから、我が日本こそ斯様な精神の最も純粹なものがよく發達してゐなければならぬものであると思ひます。今日日本精神といふことが非常にやかましいのでありますが、私は日本精神の根本は、そこにあると考へて居ります。その精神が根本になつて、忠孝一本の精神が現はれて來、或は種々の精神が現はれて來るものであらうと思ひます。殊に至誠眞實が根本であるから、此心を十分に有する國民は苟くも眞實であるものはこれを粗末に捨て去ることをせず、これを愛し敬して培ひ育んで行きます。日本が世界の眞理

眞實なものを能く同化したのも眞實の心に豊かであるからであらうと思ひます。

色々申上げたのでありますが、今まで申上げたことは、人間たる以上は至誠眞實敬愛信といふ精神生活が人間性の本質でなければならんといふ意味で、お話申したのであります。宜敷御批判を仰ぐ次第であります。

實は斯ういふ風なことを段々考へて見まして、懷德堂の事に就て本を讀んで見ました所が、中井竹山先生が寶曆十四年に、懷德堂の書院に揭示を出して居られますが、その揭示の眞先に、「弟子入りては則ち孝、出でゝは則弟、謹んで而して信、汎く衆を愛して而して仁に親しみ、行ひ餘力あれば則ち以て文を學ぶ」斯ういふ記事を發見しましたわけであります、この中で「謹んで而して信」これが敬にして而して信であり、又汎く衆を愛して而して仁に親しみ……には即私の言ふ愛の意味も含まれてあるやうに思はれるのであります。本日は私は誠に勝手な獨斷的のことを申上げましたのであります、竹山先生の、この書院の教へを拜見しまして、精神だけは竹山先生に、あまりお叱りを蒙らないかと考へました次第であります。誠に長い間御清聴を穢しましたが、これで終ります。